

水之源

2014.3

24

M I Z U N O M I N A M O T O

巻頭インタビュー 水源の里へ思いを馳せる

自然のなかにいると
生かされていると気づく

作詞家 鮎川めぐみさん



ウォークルポ

人にやさしい

日本一のバリアフリー温泉

佐賀県 嬉野市

フォトストーリー

美馬和傘 徳島県美馬市

おすすめご当地グルメ

群馬県上野村

きのこたっぷりイエローカレー

長野県木祖村

アーモンドクッキー

巻頭インタビュー 水源の里へ思いを馳せる

「上流は下流を思い、下流は上流に感謝する」。「水源の里」の理念は、双方の地域に住む人たちがお互いの暮らしや環境への理解や感謝が通い合ってこそ実現します。このコーナーでは文化人・著名人に、そうした「水源の里」にまつわるお話をうかがいます。

聞き手：『水の源』編集長 町井 且昌 平成 25 年 11 月 京都府中丹文化会館にて

自然のなかにと、
生かされていると気づく

作詞家

鮎川めぐみさん



Profile 鮎川めぐみ

作詞家、訳詞家、朗読家。高橋真梨子、夏川りみ、パクヨンハ、鈴木雅之、中森明菜など、数多くのアーティストに作品を提供。大地真央主演の「アイリーン」など、ミュージカルの訳詞も多数行い、大竹しのぶのコンサートでは、長年作詞・訳詞を担当している。

曲のメッセージを聞く

—— ポップスの歌詞を書かれることも多いですね。様々なアーティストに提供されていますが、鮎川さんに依頼がくる時点でどなたが歌うのか決まっているものなのですか？

たいてい、歌手だけでなく曲も決まっています。曲を受け取って、こういう人が歌うのでお願いしますって。

—— 歌詞が先だとばかり思っていました。

演歌の場合は歌詞が先だと思いますが、ポップスは曲ができてから作詞をすることが多いですね。

—— 曲ができていて、こういうテーマで作ってほしいと注文がくるんですか？

テーマを与えられることもあります。曲だけを聞いてイメージをふくらませて書くことがほとんどです。

—— 歌詞を書くのと詩を書くのでは違いがありますか？

ちょっと違いますね。歌詞は曲を聞いて、曲が何を言おうとしているのか、曲からメッセージをもらって書きます。これは、私が作詞を学ぶために通った松任谷正隆さんの学校の教で、自分発信ではなく、曲からメッセージを受け取るのが第一段階。次に、そのメッセージを表現する詞を書きます。



「世界がひとつの家族のように」は、「つながりと思いやり」をテーマに制作された京都府人権啓発イメージソング。インタビュー当日、京都府中丹文化会館で行われた人権集会で地元の小中学生が合唱を披露した

—— 曲からのインスピレーションで言葉を紡いでいくんですね。

ほとんどそうですね。でも、今日のイベントで地元の小中学生が歌ってくれた「世界はひとつの家族のように」の場合は逆で、先に私の気持ちを提案させてもらいました。人権啓発のイメージソングを作ることになって、作曲をされた千住明さんが、今回は詩を先に書いてと言ってくくださったんです。

—— 明瞭で易しい歌詞が印象的な歌でした。

ありがとうございます。すばらしいメロディをつけていただいて、最初に聞いたときはびっくりしました。

—— この歌詞は削ろうとか、作曲家の方とのやりとりはあるんですか？

今回は少なく、千住さんが私の思いをそのまま曲にしたいと、ほとんど手直しをせずに仕上げてくださいました。

—— 鮎川さんは桐朋学園芸術短期大学の演劇専攻出身だそうですね。そこから、どんなきっかけで作詞家の道へ進まれたのでしょうか。

桐朋学園を卒業して少しの間は、お芝居もやっていたんですよ。でも、同級生に女優の大竹しのぶちゃんがいる。すぐ身近にすごい女優さんがいるから、自分がお芝居してもどうしようもないって。私はいよいよやめてしまっ（笑）。挫折しましたね。それで、何かほかの仕事しよう、何年か英語の勉強をしてアメリカのコンチネンタル航空に入ったんです。10年くらいキャビンアテンダントとして働きながら、時間を見つけて、昔から好きだった詩を書き始めました。

—— 詩心があったんですね。

ユーミンさんが大好きだったので、会えるかもという期待もありました（笑）。

—— 詩を書くだけでなく、朗読会もされているそうですね。手話を交えることもあるとか。どんな方を対象にされているのでしょうか。

色々です。京都で開かれるイベントに何うことも多いですし、小学校や最高年齢90歳超という夜間中学に呼んでいただいたこともあります。

—— 自作の詩を朗読されるのですか？ 演劇科のご出身ですから、朗読も筋金入りですね。

基本的には私の書いた詩を読みます。でも「こういう本を読んでほしい」と頼まれることもありますね。



福島県いわき市にある友人宅の風景。鮎川さんは何度も訪れ、山で育った野菜や山菜をご馳走になった



—— 京都に来られるまでは、ずっと福島に住んでおられた。

もともとは東京と四国松山の方です。今は60代前半のご夫婦が20代のころ、山の中で暮らしたいと意気投合して2人で山へ入ったそうで。そこを自分たちで開墾して家を建て、子どもを5人育てたんです。

—— ご家族と知り合って、どのくらいになりますか？

もう10年くらいになります。娘さんの一人が東京でレストランをやっていて、そこのゴハンがあまりにもおいしいので「何でこんな料理が作れるの」って聞いたんです。そしたら「幼い頃から母親に、自分の食べるものは自分で作りなさいと言われて、山で育てている野菜を使って工夫したんです」って。京都に来られてからは、妹さんと二人でTOSCAというオーガニック野菜を使ったレストランをされています。彼女と知り合ったことがきっかけで一家ともお付き合いするようになり、今は京都の自然の中の散策を一緒に楽しんでいます。

—— 福島のお宅へしばしば足を運んだそうですが、何か惹きつけられるものがあつたのですか？

ご家族と仲良しということはもちろんですが、そこでの生活が楽しくて。薪を割ってストーブで暖をとったり、お風呂を炊いたり、水は谷川から引いてきたりしました。夜はみんなで暖炉の周り

に集まって食べて飲んで。外に出て焚火をしたり、焼き芋を焼いたり。一度体験するとやっぱりまた行きたくなる。とても楽しくて、癒されます。

—— そこで何日間か過ごされるんですね。

はい、一週間ほど。山を歩いてリフレッシュさせてもらいます。

—— 歩くのが好きなんですね。

そうですね。普段は散歩程度ですが、福島に行ったときはご家族と一緒に山登りをします。そういえば、山頂まで10キロあるところを登ったとき、私は山に慣れていないのでみんなに遅れてしまって、おいてけぼりになったことがあるんです。息は切れるし、もう歩けないと思ったけど、周りには誰もいなくて、木が植わっているだけ。助けも呼べないので、木に「どうか私を歩かせてください。力をください」とお願いして、力を振り絞ると突然、体がフワッと軽くなって歩けるようになって。自分の力で歩くんじゃなくて、何かを歩かせてくれているような感覚でした。そのまま、スタスタと山頂まで。家に帰って「木に歩かせてくださいってお願いしたら、身体が軽くなって歩けたの」って言ったら、ご夫婦が笑って「やっと気づいたの、よかったね。そういうもんなのよ」って。「自分でやろうやろうとするときはできないけど、自然はそういうパワーをくれるのよ」って教えられました。

—— 作詞をされるときに、そういう体験はプラスになっているのでしょうか。

自分でどうにかしなきゃならないともがいていいるときに、何かを与えられるんじゃないか。その与えられるものを大切にしようって思いますね。

—— 私も頭をひねっているときに、答えが降りてくるようなことがあるんです。論理的に考えていてもなかなか埒があかないってときに、何か降りてきて、勢いでガツといけるような。

あります、あります。自力でやっているというより、他者から力を借りているような感覚ってありますね。

—— 自然の中だけでなく、都会のマンションの中にも感じることでしょし。

そうですね、どこでも。

—— 自然が豊かなところへおいでになるのは、鮎川さんにとってどういう効用があると思われますか？

普段作られたものに囲まれていると、自然に助けられているとか、生かされているということをお忘れがちになると思うんです。「自分一人で何でもやっているんだ」という気持ちになってしまう。それが自然の中に入ると、そうじゃないことに気づかされるんです。

—— 自然の中に入って心身ともに癒される。そうすると気持ちが豊かになって詞の泉がふつふつと湧いてくる。ねじり鉢巻きでひねり出さなくても、スーッと湧きだしてくるような感じですね。

そうそう、それですね。自然には、忘れていたものを気づかせてくれる力があると思います。

インタビューを終えて

鮎川さんとはもちろん初対面でしたが、すぐに詩の朗読のような優しい、平易な語り口に引きこまれました。「世界がひとつの家族のように」を聞いた直後だったので、一層その印象が強かったんでしょうね。いわき市山中の生活を語るくだりでは、楽しさがあふれていました。

CLOSE-UP

京都府人権啓発イメージソング「世界がひとつの家族のように」

「世界人権宣言65周年記念キャンペーン」の一環として制作された京都府人権啓発イメージソング。「一人一人が同じ時、同じ地球に住む者同士として認め合い、互いに支え合っていけたら」そんな思いを込めて、鮎川さんが作詞、千住明さんが作曲を手がけた。この歌を一人でも多くの人に届けようと活動する「広め隊」とともに鮎川さんも各地を回り、歌って広める活動に参加している。

Vege Cafe & Dining

TOSCA

京都市左京区
北白川追分町67-7
(京都大学農学部隣)
TEL 075-721-7779
<http://tosca-kyoto.com/>

豊かな自然の中で営まれる「水源の里」の暮らし。そこには、都会にはない魅力があふれています。その一方で、都市部では想像もできない厳しい現実や苦勞があります。このコーナーでは、そうした「水源の里」ならではの課題や活性化への取り組みにスポットを当ててレポートします。

人にやさしい 日本一のバリアフリー温泉

佐賀県 嬉野市

人生は七転び八起き

今回は、京都から新幹線を利用して博多まで移動。そこからレンタカーで九州自動車道を一路、嬉野市を目指す。わずか6時間の旅。九州も近くなったものだ。

今回の取材は、嬉野温泉の老舗「和多屋別荘」の会長、小原健史さん（65歳）。参議院議員選挙に出馬経験を持ち、全国旅館組合連合会長を経て、現在は特別顧問。燦然と輝く経歴を待つ小原さんを前に緊張の色は隠せなかった。

ところが、会長室に通され、いきなり人懐っこい笑顔に触れて「ほっ」と安心。接客のプロとして歩んでこられた経歴はダテではない。癒しのツボをわきまえておられる。

取材を始めると表向きの経歴からは想像もできない「七転び八起き」の人生が語られ始めた。

高校時代に不登校を経験。一転して、大学卒業後まもなく20代前半で家業を継ぎ、意気軒昂、鼻高々。ところが、資金繰りに躓き自殺未遂にまで追い込まれる。参議院選挙に立候補するも落選。何とも浮き沈みの激しい今日までの生き様だ。

「借金を抱え、資金繰りにのた打ち回り、本当に死のうと入水までした。精神的に病んで苦しんだが、心の病は他人には見えない。いっそ障害のある体だったほうが同情してもらえるのではないか」とまで考えた。

この時の考えは、長く小原さんの心に残ることになる。そしてその自戒の念がバリアフリーに取り組むきっかけにもなるのだった。

歓楽街からの脱却

昭和30年代から40年代の高度経済成長期。温泉街は総じて歓楽街だった——と小原さんは振り返る。御多分に漏れず嬉野温泉もその最たるところだった。男性の団体旅行客が中心顧客。ホテルや旅館で宴会の後、花街に繰り出して…。

しかし、バブル崩壊以降、顧客ニーズは確実に、かつ劇的に変化し始める。ニーズに鈍感な温泉は滅びる。

この話を伺っていて、かつて地域活性化の研究で訪れた大分県湯布院温泉の事例が頭をよぎった。日本有数の歓楽街だった別府温泉の影に隠れ、顧客の獲得に難渋した湯布院温泉はピンクか保養や癒しの温泉を目指すかで町を二分する大論争となった。

保養派が勝利し、牛喰い絶叫大会や映画祭など個性的で魅力ある温泉づくりに取り組んだ結果、湯布院は日本を代表する温泉地として名を馳せている。



嬉野温泉のバリアフリー化を推進した小原健史さん



嬉野市が一望できるバリアフリーの客室



部屋の入口ももちろんバリアフリー



人にやさしいおもてなしが心情的嬉野温泉和多屋別荘

温泉つきの部屋は障害を持つ人も容易に利用できる

客室内に設けられた段差のないトイレ

小原さんは、「団体旅行から個人旅行へ」「男性中心から女性中心の嗜好に」「物見遊山や歓楽から体験や交流、癒しへ」というニーズの変化を読み取った。

しかし、最盛期の観光客数が200万人を数えた温泉地の改革は容易な道ではなかった。温泉全体のイメージアップよりも旅館の収益を考えるのは経営者の必然でもあり、賛同者はすぐには現れなかった。

それでも、小原さんは、経営不振で資金繰りに悩み、自殺を考えたとき、脳裏に浮かんだ言葉が頭から離れなかった。「精神を病むより、体が不自由な方がまし」という自らの不遜な考えが許せなかった。障害を持つ人々に癒しや満足を与える温泉に変えることで、過去の過ちに報いようとしたのだ。

バリアフリー温泉への転換

改革を目指した小原さんの動きは俊敏だった。観光地バリアフリーの先進地が伊勢志摩だと知ると早速、伊勢に飛ぶ。そこで中村元さんと出会う。

中村さんは、日本バリアフリー観光推進機構の会長を務める人物だ。話を交わすと同じ大学の卒業生という縁も判明。一瞬で固い絆が結ばれた。

中村さんから学んだのは「パーソナルバリアフ

リー基準」という考え方。それは、100人の障がい者がいれば100種類の障害があるというもの。車いすの扱い方、目線の位置など、バリアフリーに関するシステムづくりと障害を持つ人に対する接客のノウハウは、長年旅館業の経験を持つ小原さんをもってしても目から鱗だったという。

中村さんとの出会いを受け、佐賀嬉野バリアフリーツアーセンターを設立。バリアフリー基準の策定に着手し、取り除くべき4つのバリアを掲げた。

1つ目は高齢者、2つ目が身体的なバリアだ。これは主に車椅子への対応を意図する。次は精神的なバリア、最後が言葉のバリアだ。

現在、嬉野市では、県基準に適合した高齢者や障がい者が宿泊可能なバリアフリー対応の客室が12施設で20室準備されている。これにより2つのバリアは解消された状況だ。

今後は、精神的なバリアの除去に取り組む計画。具体的には、自閉症などの子どもたちを温泉に集め、研修会や交流などを通じて社会参画を促す活動が、産声を上げようとしている。

小原さんは「子どもたちの精神的なバリアはなんとしても取り除いていきたい」と力強く語ってくれた。

バリアフリーに向け官民一体

小原さんの信念に「物事を成す時3つの力(視点)を融合させることが成功の秘訣」というものがある。温泉のバリアフリーを目標に掲げた時も、イベントの開催、顧客ニーズの調査、収益性という3つの視点で経営者たちの理解を獲得していった。

7年前に設立した、佐賀嬉野バリアフリーツアーセンターの活動に呼応して「ひとにやさしい町」を政策目標に掲げた嬉野市。官民一体となったバリアフリーのまちづくりが展開されることになった。

現在、事務局長を務めるのは吉川博光さん(42歳)。当時の担当者から、バリアフリーの調査で旅館やホテルを訪問したとき「バリアフリーの調査なんて体裁が悪い。裏口から出直してくれ」とけんもほろろの対応



嬉野バリアフリーツアーセンター事務局長の吉川さん

だったと聞いていた。しかしながら、地道で堅実な活動により多くの理解者を得ることができ、市民や観光客の認知度も飛躍的に向上している。

「現在は、嬉野温泉でバリアフリー対応の宿泊施設が増え、調査活動や研修会などの取り組みが始まって以降、着実にお客様が増えている。町の人々の

理解も広がってきた」と吉川さんは成果を実感している。



バスターミナルや観光案内所と併設のバリアフリーツアーセンター



車椅子での観光相談に対応するスタッフ

新しい旅の形は「親孝行旅行」

大型バスで乗り付けてどんちゃん騒ぎとピンク街。恋人や友人など気の置けない人とプライベートで特別な時間を過ごしたい。その時々を経済や人々の指向によって旅行のスタイルは変遷してきた。

では、これからの時代に求められる旅の形を小原さんに尋ねると「核家族化で親は田舎、子どもは都会で暮らすという生活スタイルが一般的な現代。年老いた親を介護するのは大変だが、せめて家族で旅行でも…。そういう親孝行旅行が確実に増加する」という返事が返ってきた。

一歩先を見据え、次の時代の旅のニーズをしっかり把握する小原さんは、嬉野温泉の生き残り対策にも余念がない。

「個人旅行の時代の中で、家族旅行は、人数も多く消費額も大きいからね」茶目っ気たっぷりな笑顔は、したたかな戦略とは縁遠いものだった。

癒しながら癒される

佐世保の高校を卒業し、和多屋別荘に就職して6年を迎えた鶴丸咲喜さん(24歳)に話を伺った。「最初はブライダルを希望していたのですが…」とはにかむ。「でも、今はこの仕事で良かったと感謝しています」と毅然と答えてくれた。

旅館がバリアフリーになったことで変化はありますか?と尋ねると「先日、東京からのお客様が、結婚記念日に年老いたお母さんと3人でお越しいただきました。予約されていた部屋が和室でお母さんには負担が大きいと判断し、椅子テーブルを持ち込み、喜んでいただきました」と笑顔。人にやさしい和多屋別荘の方針は、若いスタッフにも着実に浸透している。

【取材・文：永井 晃】



人にやさしい接客を実践する和多屋別荘の鶴丸さん

有とも聞く。相手の人柄や立場に想像力を働かせ気持ちを抱く。

和多屋別荘取材して、障がい者に優しい接客は、健常者にとっても優しい接客となることを学んだ。言葉遣いや心遣い、身のこなしなど、すべてに洗練されているが、とても温かい。おもてなしの真髄を見た。

川港「塩田津」

嬉野市は、平成18年嬉野町と塩田町の合併により誕生した。面積126km²。現在の人口は約28,000人。旧塩田町にある「塩田津」は、干満の差日本一を誇る有明海の特長を利用した川港として、また、長崎街道の宿場町として、江戸時代から昭和にかけて大いに栄えた。何度も大火に見舞われた経験を活かした井蔵造と呼ばれる丈夫な家屋が今も数多く残る。

往時の賑わいは途絶えたものの、平成17年に国の重要伝統的建造物群に指定されたことが追い風となり、町並み保存に住民が立ち上がった。毎年2、3棟の建物が改修され、町並みが復元されてきている。



復元が進む塩田津の町並み



商売繁盛を願うえびす像は、商の町の歴史を物語る

温泉湯どうふ

神功皇后が戦の帰路に当地に立ち寄られた。湯に浸かった兵士の傷が癒えた様子を喜ばれた皇后が「あな、うれしいの」と言われたことが起原となったと伝えられる嬉野温泉。ぬめりのあるお湯は、ナトリウムを含む重曹泉だ。みずみずしい肌を蘇らせ、飲むと胃腸や肝臓の機能回復に効果があるとか。「日本三大美肌の湯」とも称されている。

この温泉水で豆腐を煮込むと「なんとということでしょう」。豆腐の表面が溶け、とろとろの湯どうふに早変わり。豆腐が温泉水の成分に反応し溶けるのだ。



嬉野温泉の名物が温泉湯どうふ

嬉野市はこんなまち



↑志田焼の里博物館
陶石の粉碎から陶土の精製、磁器づくりや絵付けなど、焼き物づくりのすべての工程が見学・体験できる

志田焼

志田地区は、塩田津に荷揚げされる天草陶石の影響もあり、江戸時代中期から日常で使う磁器の生産が行われていた。

大正時代に、志田陶磁器株式会社が設立。志田焼の全工程を集約化する工場が建設された。昭和59年の工場閉鎖までの間、基幹産業として地域を支え続けてきた。製造工程の一元化と大量生産方式の工場は全国でも珍しく、九州北部の窯業近代化を物語る施設として、平成21年、近代化産業遺産群(経済産業省)に認定された。



コンサートホールに活用される石炭窯

銘酒「東長」

瀬頭酒造は、寛政元年(1789年)創業の老舗。上質の米と清冽な水、澄んだ空気など、酒造りに欠かせない条件が揃った塩田津で連綿と受け継がれてきた酒蔵だ。地元の人々がこよなく愛し、飲み続けてきた酒が「東長」なのだ。

銘柄の東長を命名したのは第19代内閣総理大臣の原敬。彼は「東洋の王者にふさわしい酒」という賛辞を東長という名に込めたという。

この酒には、もう一つのエピソードがある。戦後の動乱期は米不足で酒蔵の多くは酒造りの休止を余儀なくされた。そんな時、東長は東京でのパーティーでマッカーサー元帥に出会う。彼は、東長をGHQの指定商品にし、特別に米の配給が受けられるよう働きかけた。

多くの偉人の寵愛を受けた東長は、今も多くの人々を魅了し続けている。



瀬頭酒造

水源の里には、様々な文化や伝統行事が残されています。このコーナーは、多くの先人によって継承されてきた匠の技を全国の皆さんに紹介します。今回は、「美馬和傘」ただ一人の作り手である三好アヤノさん（みよし）を訪ねました。

うだつの町を彩る 美しき伝統工芸 美馬和傘

徳島県美馬市



高度な技術が集結し、 一張りの傘ができる

電話で連絡をとりながら、やっとの思いで美馬市美馬町にある三好アヤノさん（85歳）の自宅兼工房に到着した。かつては和傘の生産で活況を呈していただろう町の街道筋には民家が建ち並び、当時を偲ばせるものは見当たらない。自宅の中に招き入れられると一転、目に入るのは古い調度品や立派な家具。8年前に亡くなったご主人・政信さんが受けた伝統的工芸品産業功労者（一般財団法人伝統的工芸品産業振興協会）の表彰状。大切に保管された大きな和傘や色とりどりの和傘の数々。ここで長い時間、見事な和傘作りが継承されてきたことを思い起こさせた。



和傘のつくりを説明してくれる三好アヤノさん



天ろくろ・手もとろくろ
和傘の材料の多くは岐阜市内で生産されている

刺繍のように美しい「かがり」



美馬の和傘作りは、江戸時代初めから続く。大正時代には年間100万本を生産し、岐阜県に次ぐ全国第2位の生産高を誇った。当時、美馬町には200から250軒の和傘屋が並んでいたという。三好さん宅の向こう三軒両隣も和傘屋で、この辺りはさながら和傘生産の団地だったのだ。

和傘作りの工程は細かく分けられ、家ごとに分担し作ってきた。3ミリ程の細い竹骨を作る職人、「ろくろ」という細かな切り込みがある木製の部品を作る職人、部品を合わせ骨組みを作る職人、和紙を貼る職人。そして、職人を束ねる親方。美しく精巧な和傘作りは、分業によって技術を高め受け継がれてきたのだ。

和傘作りで最も難しいのは、ろくろと竹骨をつなぐ作業だとアヤノさんは言う。傘のてっぺんにあるのが「天ろくろ」、上下に動かし傘を開閉する部分が「手もとろくろ」といい、どちらも木綿糸で竹骨と固定する。ろくろの切り込みは傘が大きくなるにつれ細くなる。強度を保つための核心となる工程だ。

骨組みが出来たら手漉き和紙を貼っていく。さらに、傘の用途によって柿渋や漆（現在は漆の代わりに亜麻仁油が使われている）、カシ油をかけ、乾かし

ながら仕上げていく。根気と時間をかけなければ出来ない匠の手仕事だ。

三好さん宅で見せていただいた和傘は、大きな野点（屋外で行う茶会）用か、晋山式（僧侶が新たに住職となる際の儀式）に使うような立派なものばかり。傘を開くと竹骨に赤や緑、紫の糸で「かがり」と呼ばれる飾りが施されていて、刺繍のように美しい。この工程がアヤノさんの得意分野だとお見受けした。

アヤノさんは見事な和傘を開くたび、次々とつかしい記憶が蘇えるようだ。油を塗って仕上げた雨傘を乾かすために、皆が先を競って収穫後の田んぼに干しにいった思い出などを楽しそうに話してくれた。

作れば作るだけ 売れた和傘がパタリと 売れなくなった

アヤノさんの夫・政信さんは裁判所に勤めた後、家業の傘屋を継いだ。終戦後の数年は、作

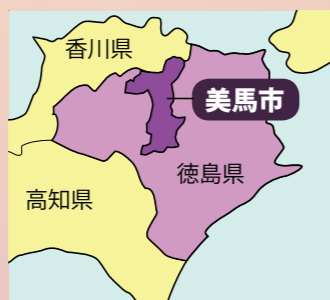
れば作るだけ売れる、和傘にとって最も好景気の時代で、朝6時から夜の11時まで傘を作り続けたという。ここで雨傘を仕入れ、一日で50本販売する人もいて、町は活気に満ち溢れていたそう。家事と子育てに加え、慣れない傘作り。傘のことは何も知らなかったアヤノさんは、無我夢中で過ごしたと、この頃を振り返る。

だが、そんな好景気も長くは続かなかった。昭和30年代後半になって雨傘はパタリと売れなくなる。コウモリ傘が出現したのだ。筆者の小学校時代は蛇の目傘を使っていた。傘独特の油の臭いがしたことは覚えているが、何時からコウモリ傘を使うようになったか、思い出すことは出来ない。

若者が竹骨の中に和紙が仕舞われているのを見て、驚きの声を上げたという。現代の傘は、布やビニールなどの生地を骨の外に出すのが常識。若者の驚きが頷ける。和傘は雨傘の分野から完全に姿を消してしまったのだ。

美馬市紹介

平成17年に脇町・美馬町・穴吹町・木屋平村が合併して誕生。人口約31,000人、面積367.38km²。剣山を源流とする清流・穴吹川、日本三大暴れ川の一つで、別名「四国三郎」とも呼ばれる四国一の大河・吉野川が流れる。阿波藩が奨励した藍づくりで栄え「うだつの町並み」で知られる脇町。四国最古・最有力の浄土真宗寺院「安楽寺」など、由緒ある寺が並ぶ寺町と、現在も当時の繁栄を色濃く残している。



うだつ

二階の壁面から突き出した漆喰塗りの袖壁で、防火の役目をする。裕福な商家はこの「うだつ」をあげた立派な家を建てたことから、一向に出世できないことをいうことわざ「うだつが上がりぬ」の語源となった。



後継者を育て、 新たな歴史を刻む

和傘の伝統文化は用途を変え、たくましく生き延びている。踊りや舞の小道具、神社仏閣の祭りや野点用として。また、観賞用としてホテルのラウンジに飾られるなど、美術工芸品としての価値を高めている。

一方、和傘作りを継承する職人は減少し、徳島ではアヤノさんが最後の一人。しかも、政信さんが亡くなった後は、傘作りを辞めていたという。今にも途切れそうな伝統技術を何とか後世に伝えることが出来ないか。安価なビニール傘や洋傘に押され、和傘が消えゆく現状に危機感を持った美馬市は、美馬和傘復活に向けて動きだした。

当時、美馬市商工会の職員として関わっていた佐藤公章さん（現在は美馬市地域雇用創造協議会・事務局長）に話を聞くことができた。佐藤さんには心に残る記憶がある。町の祭りを担当し和傘の実演を企画。健在だった政信さんに依頼し、2日間で5本の和傘を作ってもらった。作業中は声もかけられない



大きな和傘を開いて見せてくれた

ほどの雰囲気があった。実演終了後、政信さんに「1本あげようか」と言われたが、祭りのことで頭がいっぱいで、即座に「いりません」と返事をしてしまった。後にアヤノさんから、政信さんがショックを受けていたと聞かされたと言う。「そんなやりとりのあった私が奥さんに講師をお願いに行くとは、何と言う皮肉なのか」。佐藤さんは、何度頼みに行っても「もおええー」と断わるアヤノさんを2か月かけて説得。平成23年11月にアヤノさんを講師に和傘作りを学ぶ「伝統工芸マイスター養成講座」（厚生労働省の委託事業）をスタートさせた。講座は24年度も開催され、受講者は合わせて30人余。初めは先生と呼ばれても「誰のこと？」と返事もしなかったとか。「次第に指導に力が入り、ご自身も見違えるように元気になられたんです」

と佐藤さん。これを契機に、アヤノさんが和傘作りを再開したと口コミで広がり、大きな和傘の修理が次々と舞い込むようになった。取材前日には金沢のホテルからの依頼があった、直径2メートルもある和傘を修理して納めたそう。アヤノさんは「大きな傘も私一人でやりました」と仕事ぶりを披露してくれた。

30人集まった講座の受講生の中から男女3人ずつの計6人で「美馬和傘製作集団」を結成した。引き続きアヤノさんに教えを受け、番傘を一人1本ずつ仕上げた。受講生は、デザインの美しさや高度な技術に魅了されたのだという。6人の出現を一番喜んでいるのはアヤノさんと佐藤さんは話す。後継者が生まれ、和傘作りを再開したアヤノさんには精気が感じられ、得意の「かがり」に益々磨きがかかりそうだ。

【取材・文：岩岡廣之】

道の駅 藍ランドうだつ 「藍蔵」

美馬市脇町にある道の駅「藍蔵」には、和傘作りの技術をマスターした6人からなる「美馬和傘制作集団」が製作した直径80センチの日傘が並んでいた。開いてみると赤地にひし型の模様があしらわれていて、その場がパッと明るくなった。

同道の駅では和傘のレンタルも行っている。豪壮な商家群「うだつの町並み」を日傘をさして散歩できるというものだ。この古の街に和傘の花が咲く姿を思い浮かべると楽しい気分になる。



きのこたっぷりイエローカレー

群馬県上野村

700円



上野村きのこセンターは、「国産安心きのこ認証」を取得。



群馬県の最西南端に位置し、長野県・埼玉県と境を接する上野村。東京から2～3時間の場所にありながら、総面積の9割

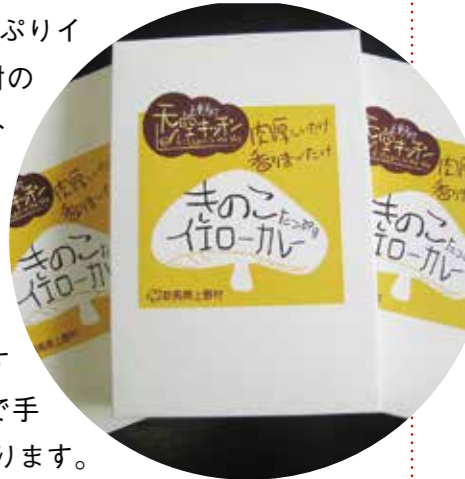
以上が森林という緑豊かな森の郷は、“関東一きれいな川”の認定を受けた「神流川」や関東最大の鍾乳洞「不二洞」、上野村温泉郷など、風光明媚な大自然が魅力です。十石みそや猪豚、きのこ、木工品などの特産品があります。

こちらの自慢のご当地グルメが「きのこたっぷりイエローカレー」。このカレーはその名の通り、上野村の特産品である“きのこ（まいたけ・しいたけ）”を使ったレトルトカレーです。

具材のきのこは、自然豊かな環境の中、平成の名水百選にも選ばれた「神流川源流水」を使用し、無農薬で栽培されています。通常のきのこに比べ、香りや風味が群を抜くのはもちろん、とにかく大きくて肉厚！ そのきのこを活かす独自ブレンドのスパイスを使用し、ルーからすべて手作業で手間暇を掛けて作られるというオリジナルカレーに期待が高まります。

早速、パウチを湯煎で数分温め、盛り付けたご飯に投入です！レトルトはこの手軽さがたまりません。まずゴロゴロ入ったきのこの量の多さにビックリ！“きのこたっぷり”の商品名に偽りなしです（笑）。きのこの存在感を際立たせるルーは、バターのコクと風味が最大の特長。鶏肉ときこの旨味が味に深みを与え、玉ねぎのシャキシャキした食感も心地よいアクセントに。マイルドながら家庭では出せない本格カレーの味わいは、レトルトカレーの域を超えています。

【取材・文：白波瀬聡美】



【お問い合わせ】

上野村
農産加工センター
〒370-1616
群馬県多野郡上野村
大字乙父 894 番地
TEL 0274-59-3775
FAX 0274-59-2882
営業時間
8：00～17：00
(月～金曜)

スパイスにもこだわり、市販のレトルトカレーとは一味も二味も違う味に仕上げたカレー。常温で半年以上日持ちするも嬉しい（開封前）。



水源の里
発

おすすめ
ぶ当地
グルメ



アーモンドクッキー

(200g) 560円、(400g) 1,000円、(600g) 1,430円

長野県木祖村

長野県は中信地方の木曾郡北部に位置する木祖村。村名は、郡を縦断する木曾川の源流の地であることから、「木曾の祖」という意味を込めて付けられたと言われています。中央高地特有の気候を利用した高原野菜の生産が盛んで、300年以上の歴史をもつ「お六櫛」は県知事指定の伝統工芸品として有名。豊かな自然の中にある「やぶはら高原スキー場」には毎年多くのスキー客が訪れます。

今回ご紹介するのは、木祖村で長年愛されるご当地銘菓「木曾の手づくりクッキー」。

昭和52年に販売開始以来、その美味しさが口コミで広まり、今では全国から注文が入るほどとなりました。クッキーは地元特産のそばや和くるみ、松の実ショコラなど全9種類ありますが、一番人気は看板商品の「アーモンドクッキー」。

それでも正直「クッキー？ さほど珍しいお菓子でもないけどなあ」と思いながら、パッケージを開けました。中からは大きな四角形のクッキーが。しっかりとした厚みがあり、見た目はかなりハードな印象。しかし一口かじると、驚くほどサクサクとした軽～い歯触り！ ふんだんに入ったアーモンドスライスが噛むほどに香ばしく、豊かな風味が口の中に広がります。控えめな甘味がシンプルな素材の美味しさを引き立て、クッキーにありがちな甘ったるさやクドさがなく、あっさりとした後味です。

「一度食べたら忘れないクッキーを作りたい！」ご主人のこだわりと創意工夫が見事に実を結んだ、ちょっと他にはない逸品です。

【取材・文：白波瀬聡美】

お店ではクッキーのほか、木曾伝統の和菓子や洋菓子の製造販売もしています。



【お問い合わせ】

北原製菓店

〒399-6201
長野県木曾郡木祖村
藪原 1090-1
TEL/FAX
0264-36-2069
【営業時間】
9:00～18:30
【定休日】木曜

<http://www.cnet-kiso.ne.jp/k/kitahara/>

↑
独自の製法で一枚一枚丁寧に手作りされる「木曾の手づくりクッキー」は全国菓子博有功金賞を受賞。全国発送も可能。

協議会だより

トピックス

第7期は、173市町村でスタート

協議会では、組織の拡大に向け多くの市町村の参画をお待ちしております。

都会から限界集落を応援！「水源の里イキイキプロジェクト」始動

このプロジェクトは、綾部市とNPO法人ビーグッドカフェが共同で、「イキイキ指数」の創設などに取り組むものです。以下、11月14日に東京で開催した、キックオフフォーラムの様子を報告します。



意見交換の様子。左から「半農半X」を実践する塩見直紀さん、藻谷浩介さん、山崎綾部市長

当日は、協議会会長の山崎善也綾部市長をはじめ、参画市町村の首長や関係者、一般参加者ら約100人が参加しました。

フォーラムでは、山崎綾部市長の「限界集落イキイキ宣言」に続き、プロジェクトの応援団長を務めることに決まった日本総研調査部主席研究員の藻谷浩介さんが「里山資本主義で行こう！」と題して講演。今後、超高齢化社会が待ち受けている。今こそ、マネー資本主義を脱却し、地産地消やエネルギーの自給など、環境にやさしい生き方を実践できる田舎の生活を見直すことが大切だと説きました。

また、プロジェクト代表のシキタ純さんが「イキイキ指数」の取り組みについて説明。住民の意識を「体の健康」「心の健康」「食の豊かさ」など6つの項目に分類・指数化し、田舎で生活することの「幸せ度」をミエル化する試みであると紹介しました。既に綾部市で試行的に調査を行ったが、協議会参画市町村全体へと広がることで田舎に対する社会的関心がさらに高まると呼びかけました。

編集部より

読者アンケート&プレゼント

『水の源』では、今後の誌面づくり充実のため、読者アンケートを実施しています。アンケートにお答えいただいた皆様のなかから、おすすめご当地グルメのコーナーで紹介しました「きのこたっぷりイエローカレー」か「アーモンドクッキーほかクッキー3種」を各1名様にプレゼントします（賞品の指定はできません）。

はがきに、①面白かった記事、②今後取り上げてほしい内容、③水源の里への思いなど、あなたのご意見・ご感想、住所、氏名、電話番号、性別を明記の上、下記宛先『水の源 24号』読者アンケート係までご応募ください。

【平成26年4月11日(金) 消印有効】

※当選者の発表は賞品の発送をもってかえさせていただきます。
※ご応募いただいた皆様の個人情報は、賞品発送以外の目的では使用しません。



『水の源』定期購読者募集

本誌を定期購読していただける方を募集しています。
年間購読料：1,000円（年4回発行）
お申し込み：下記連絡先、『水の源』定期購読係まで

▲全国水源の里連絡協議会 事務局

綾部市役所 定住交流部 水源の里・地域振興課（上林いきいきセンター）
住所：〒623-1122 京都府綾部市八津合町上荒木5番地
TEL：0773-54-0095 FAX：0773-54-0096
E-mail：suigen@city.ayabe.lg.jp <http://www.suigenosato.com/index.htm>

お問い合わせ、
ご連絡先は



「風薫る頃」
岐阜県揖斐川町
谷村 紘一さん
(岐阜県本巣市)



「光と水のシンフォニー」
兵庫県香美町
長谷 利宏さん(兵庫県姫路市)



「水源まつり—意気天をつく—」 鳥根県吉賀町
東村 一郎さん(山口県周防大島町)



「ぼちぼち始めっかー」 京都府京都市
犬持 光男さん(京都府亀岡市)



「美味しい水を頂く」 高知県仁淀川町
竹村 悦子さん(高知県高知市)

私たちは水源の里を応援します!!

全国環境整備事業協同組合連合会
一般社団法人 全国浄化槽団体連合会
全国森林組合連合会
一般社団法人 全国清涼飲料工業会
全国農業協同組合連合会

電気事業連合会
独立行政法人 水資源機構
綾部トーヨーゴム株式会社
公益社団法人 大分県薬剤師会
株式会社 神内電機製作所

株式会社 関西丸和ロジスティクス
医療法人社団 恵心会
日東精工株式会社
社会福祉法人 丹の国福祉会
舞鶴喜楽鋳業株式会社